

# 博 士 学 位 論 文

— 論文要旨および審査結果の要旨 —

第 11 号

武蔵野音楽大学

## — は し が き —

本編は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規定による公表を目的として、平成28年度に本学において博士(音楽学)の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

## 目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論文題目	頁
博甲第 19 号	博士 (音楽学)	赤 木 詩 子	H. ヴォルフの《ゲーテ詩集》研究 — 詩と音楽の配列の意味 —	1
博甲第 20 号	博士 (音楽学)	栢 菅 有 香	細川俊夫の創作、活動と批評 — 日本とドイツからの考察 —	4

氏 名	あ か ぎ う た こ 赤 木 詩 子
学位の種類	博士 (音楽学)
学位記番号	博甲第 19 号
学位授与日	平成 29 年 5 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	H. ヴォルフの《ゲーテ詩集》研究 — 詩と音楽の配列の意味 —
論文審査委員	主査 教 授 寺 本 まり子 副査 教 授 檜 崎 洋 子 副査 講 師 稲 田 隆 之 副査 講 師 子 安 ゆかり 副査 講 師 福 田 弥 (慶應義塾大学准教授)

## 論 文 要 旨

本論は、19 世紀後半にオーストリアで活躍したフーゴー・フィリップ・ヤーコプ・ヴォルフ Hugo Philipp Jakob Wolf (1860-1903) の歌曲集《独唱とピアノのための J. W. v. ゲーテによる詩集 Gedichte von J. W. v. Goethe für eine Singstimme und Klavier》(1888-89 年作曲、以下《ゲーテ詩集》) 全 51 曲を対象とした作品研究である。ヴォルフが一人の詩人の詩による大規模な歌曲集を「詩集 Gedichte」と名付けることで表現した音楽について、原点となるヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe(1749-1832) の詩集との関連の考察、及び詩と音楽の配列を分けて論じる方法によって、ヴォルフ自身が意図を持って構成した「詩集」の意味を明らかにすることを試みた。

ヴォルフは、1888 年以降 4 年間続いた爆発的な歌曲創作期において、アイヒェンドルフ、メーリケ、ゲーテという一人の詩人の詩を用いた大規模な歌曲集を 3 つ完成した。また、歌曲創作の最初期からゲーテの詩を用いたヴォルフであったが、《ゲーテ詩集》を終着点とした。このような位置を占める《ゲーテ詩集》であるが、先行研究においては、同じ詩に付曲した他の作曲家との比較が大半を占め、作品の全体像を明らかにする研究は十分と言えない。

本論は全 5 章と結びから成るが、概要は以下の通りとなる。また、本論では「詩集」としてのフレームワークの存在を指摘しているが、この部分に焦点を当てた記述を行った。フレームワークとは、最初に享受すべき作品を冒頭に配列し、全体を締めくくるべき作品を末尾に配列することである。

第1章では、《ゲーテ詩集》の概要と位置づけを確認した。

第2章では、創作に用いられた詩の出典を考察し、ヴォルフの作品は、ゲーテによる詩の区分を反映している点を指摘した。《ゲーテ詩集》における楽曲の区分及び配列は、ゲーテの詩集における詩の区分及び配列とヴォルフによる配列の組み合わせである。本論では、この区分に沿って詩と音楽を分析している。

第3章では、フレームワークを含まない G11—G48(以下、歌曲をゲーテのイニシャルを付した通し番号で表記)を考察した。G11—G13「バラード」の区分では、バラードとしての特徴が表れていると指摘した。続く G14—G31「様々な詩」の区分では、詩と音楽ともに2曲ずつの組み合わせの傾向が確認できた。G32—G48『西東詩集』の区分では、ヴォルフによる詩と音楽の配列が新たな音楽による物語を創出して、かつ『西東詩集』の主要テーマを前面に押し出している点を指摘した。

第4章では、小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の詩に付曲された10曲の考察を行った。「豎琴弾き」の詩と「ミニヨン」の詩はいずれも、苦悩を歌い、死と神的なものの存在を包含していることを指摘し、また、ヴォルフが組み替えた詩の配列には、豎琴弾きの近親相姦という「罪」の存在が関与していると考えた。G1—G3〈豎琴弾きの歌〉の音楽は、下行の半音階旋律の多用、ナポリの和音、ドイツの6の和音の手法を伴った、テンポの遅い短調の響きである。このような音楽的要素を一部共有しながら、G5—G7〈ミニヨンの歌〉は、テンポや調性においてより多様化している。この音楽的特徴の違いは、豎琴弾きの苦悩が罪に依拠する一方、ミニヨンの苦悩が不幸な生い立ちやヴィヘルムへの想いという複雑なものであるためと考える。また、ヴォルフによる配列の意図を示唆するのは、G1〈豎琴弾きの歌I〉とG5〈ミニヨンの歌I〉に用いられた同一の和音であると考える。この和音は、いずれも「苦悩」を象徴する言葉に用いられて強い関係性を示しているが、このようにして豎琴弾きの罪の存在に伏線を敷いていると捉えるからである。

第5章では、G49〈プロメテウス〉、G50〈ガニュメート〉、G51〈人間性の限界〉(以下「3部作」)を考察した。ヴォルフは、神話と神々を題材とした3部作を歌曲集の最後尾に配列している。筆者は、「豎琴弾き」と「プロメテウス」の間に「人間創造」という詩的内容の繋がりを見出した。3部作は、神と人間の対比を経て、「人間性の限界」にて、人間の個々の命である「小さな環」の連鎖が確立する人間の永遠性に帰結する。音楽では、音の高低や調性などにより、神と人間を表現し分けるという手法が確認できる。そしてG51では、12音全てを下行の半音階に組み込んだ「小さな環」と詩の含意を描出する増三和音が、楽曲を締めくくる。

《ゲーテ詩集》全体として、まず、ヴォルフの詩の選択と配列が、個々の詩に新たな繋がりをもたらしていることが明らかである。その結果、詩の意味内容は、人間の罪に始まり、人間のあらゆる側面の描写を経て神々の世界に達し、命の連鎖による人間の永遠性という普遍的なテーマに帰着しているが、そこにはフレームワークが存在して、「詩集」としての意味を深めている。音楽は、多様性を示しながら、詩の配列がもたらす新たな繋がりを具現化

している。このようにして、ヴォルフが編んだ「詩集」は、ゲーテの詩が持つ意味を変えるのではなく、個々の詩が内包するものをより鮮明にしているのである。

## 論文審査結果の要旨

執筆者は、フーゴ・ヴォルフが 1888 年から 1889 年にかけて作曲した《独唱とピアノのためのヨハン・ヴォルフガング・ゲーテによる詩集》(以下《ゲーテ詩集》) 全 51 曲と修士論文以来取り組んできたが、本論文ではヴォルフが歌曲の配列によってゲーテの詩に付与した新たな意味や関連性を詩と音楽の分析によって明らかにすることを目的とした。

本論文は、先ず最近に至るまでの欧米の先行研究をつぶさに考察し、同一の詩を用いた他の作曲家、特にシューベルトとの比較研究は散見されるものの、《ゲーテ詩集》全体を研究対象とした研究が皆無であることを明らかにした。執筆者自身の研究は、他者の意見に対する批判的な態度がやや足りないものの、ヴォルフの創作期に関して、あるいは特徴的な作曲法に関して、先行研究を取り入れている。さらに、ややもすれば分析に終始しがちな歌曲研究にあって、ウィーンの図書館に所蔵されているこの歌曲集の原典資料にも目配りしている点は大いに評価できる。また、ヴォルフ自身の言説がほとんど見られない中で、ヴォルフと関係を持った人々の書簡にまで資料探索の網を広げ、執筆者自身の翻訳によってヴォルフの作曲姿勢を明らかにしようと真摯に取り組んでいる。

さらに、執筆者自身が工夫した図式を駆使して、ゲーテの詩集にみられるフレームワークがヴォルフの当該曲集にも存在することを明らかにし、ヴォルフの《ゲーテ詩集》は、人間の背負った罪に始まり、人間の永続性という普遍的なテーマに帰着するように楽曲を配列した「詩集」であると結論付けている。しかし、この結論の説得力は、論拠となるべき楽曲分析に散見されるやや印象論的な記述によって弱められていることが惜しまれる。さらに、作曲順と実際の曲順の関係、共通モチーフ、全体の調性の枠組みから見えるものへの、より踏み込んだ考察も望まれよう。しかし、ヴォルフの《ゲーテ詩集》の全歌曲について様々な角度から分析を試みており、新たな知見としていくつかの音楽上の特徴を指摘している点は評価すべきである。本論文は《ゲーテ詩集》全 51 曲の配列に着目した最初の基礎的な研究として、今後のヴォルフ研究に寄与できる可能性を示しており、課程博士の称号を授与するに値する水準には十分に達していると判断できる。

博士學位論文      論文要旨および審査結果の要旨 (第 11 号)

---

平成 29 年 8 月 5 日発行

発 行    武蔵野音楽大学大学院

編 集    武蔵野音楽大学学務部

〒176-8521    東京都練馬区羽沢 1-13-1

電話    03-3992-1128

---